

定期的な週末里親など短期預かりに関する里親と児童養護施設職員の認識

—Y 県における調査研究—

福祉心理学専攻 須藤 恭子

本研究では、Y 県の短期預かりの事業である家庭生活体験事業が円滑に進むことに資する知見を得るため、社会的養護の立場である里親と児童養護施設職員が、短期の預かりに対してどのように認識を持っているかを比較検討することを目的とした。

週末里親や家庭生活体験事業などの短期預かりが、Y 県において現在どのように実施されていて、どのような効果をもたらしているのかを認識するために、まずは質問紙による調査を行なった。里親に対する質問紙調査の対象者は、Y 県において登録されている 155 世帯の里親であり、そのうちの全回答者は 52 世帯であった。うち一部無記入による不完全なデータが 5 世帯あったため、有効なデータは 47 世帯であった。一方、児童養護施設の職員に対する質問紙調査に関しては、Y 県の児童養護施設 5 か所と乳児院 2 か所、児童家庭支援センター 2 か所の計 9 か所の職員を対象に質問紙を送付し、そのうちの 19 名から回答が得られた。うち一部無記入による不完全データが 2 件あったため有効なデータは 17 名であった。その結果、短期預かりの効果と、短期預かりを引き受ける上で、里親が必要な支援や情報のいずれにおいても、それらに関する認識に里親と児童養護施設職員の間で大きな違いは見られなかった。特に短期預かりにおける家庭での生活体験が子どもの成長に結びつくという認識は里親も児童養護施設職員も強く持っていることが明らかとなった。加えて、里親に対する支援として、里親の小さな悩みや不安に対応することや、里親支援機関との信頼関係の必要性を強く認識している者が里親にも児童養護施設職員にも多く見られた。

さらに、本研究では、面接調査を行い、両者の短期里親に関する認識について、より詳細に検討を行った。里親については、さまざまな年代層やキャリアを考え、負担にならないよう、積極的に活動されている方をお願いした。また、児童養護施設の職員については、日頃から面識もあり会話経験のある方を中心に、接点のある方の紹介から、施設で里親の支援員をされていて、非常に豊かな経験と認識をお持ちの方で、日頃から問題意識をお持ちの方から、選ばせていただいた。質問紙だけでは不足な点を言葉に表していただき、双方の意識の違いや問題点を比較検討した。その結果、里親と児童養護施設職員の共通の認識として、短期預かりを日常の生活体験と多様な人間関係を子どもたちに提供できる機会として意味づけていたことが明らかとなった。さらにそれが現在の子どもの心理的支援や生活の充実につながることで、さらには、子どもの社会に出てからの生活に結びつくことが共通して認識されていた。さらに、里親受託の促進という観点も短期里親の効果として両者で共有されていることが示唆された。また、語りの分析を通して、親権を持つ実親の問題が、里親と児童養護施設職員とで共通に大きな課題として認識されていることや、両者の情報共有と話し合いの場が、里親が短期預かりを進める上で必要な支援として共通に認識されていることが明らかとなった。

違いを感じることは、里親に関しては、何はともあれ「お役に立ちたい」という思いが強いことであった。ボランティア精神に近いものである。児童養護施設の立場では、さ

さまざまな異なる成育環境で育った子どもに寄り添う姿勢が、その立場に感じられた。この立場の、立ち位置の違いは、様々な形で表れてくる。例えば里親に対する手当が十分でないことや預かりの保険が存在しないことにも表れていて、施設は可能な限りでの対応を望み、対応してくれるだけでありがたいと思っている。里親はボランティア精神で対応し、どんな状況でも引き受けることを喜びとしている。双方の思いの違いや立場の違いは課題や支援に対しても現れてくる。

一方で、面接調査の中で、短期預かりを進める上で気がかりな点として、主に児童養護施設職員が、①家庭的・個別的関わりを必ずしも望まない子どもの存在、②施設内の短期預かりの機会を利用した子どもと利用していない、もしくはできない子どもとの関係性の問題、③短期預かりを実施する際の保険の適用の問題を認識していることが、明らかとなった。加えて、短期預かりを進める上で、里親が児童養護施設に求める事柄と児童養護施設職員が里親に求める事柄との間に違いが見られた。

以下の結果をふまえ、家庭生活体験事業の円滑な実施に向けての課題について考察を行った。